

終刊の辞

一九七七年、例会がスタートしてから十一年、復刊第一号を出した七九年から数えても満九年の歳月を費して、ようやく終刊号にこぎつけることが出来た。これだけの時間をかけて、第二次近世仏教研究会は何を為したのだろうか。とにもかくにも十一冊の雑誌を世に送り出し、何ほどかの、近世仏教に関する知見を深めることは出来た。けれども、復刊にあたって掲げた課題にどこまでせまりえたのかと自問するとき、胸を張れない気がする。

当初予定した活動期間の八三年までの五ケ年間に、四十数回の例会と五回の夏期研修会をもったことは、近世仏教研究のプロバ―を多数擁する同人の意気込みを示すものであった。本末制・地域と民衆・十八世紀仏教思想・宗旨人別帳と寺檀制・近世仏教の全体像、という夏期研修会の年度別テーマに、そのことを知ることが出来よう。第一次研究会の総括から見出された、教団・地域・民衆・教学という課題を具体的に展開しようとしたこれらのテーマをめぐって、例会発表・研修会での集中討議は、研究の活性化をうながし、それなりに意義あるものであった。ただ、その成果が十分に雑誌に反映されなかったうらみがある。

こうして十年を費する内に、第一次研究会の背景にあった教団近代化という課題も、いまやその様相を変えてしまった。社会状

況も歴史学界の動向も大きく変わってしまった。例えば、「いま社会史がお面白い」という惹句にのって、近世史では「江戸ブーム」というレトロが横行している。あるいはそこから、民衆の日常性に根ざした近世仏教研究が出現するかも知れない。本終刊号には、その方向が若干なりとも見えてきた。それは、現世利益的近世仏教まる肯定ではありえない。この点で、第一次研究会が残した課題を一步進めることが出来たかと思う。

何をどのように総括すべきかも判然としないままに、第二次近世仏教研究会は終了の時を迎え、本号をもって終刊とする。第一次同人の竹田聴洲氏や、支援していただいた森竜吉氏が、この間に故人となられた。第二次の同人たちも、いまや若いとはいえず、それぞれに立場に変動をきたし、あるいは問題関心が変化してしまった。再び集まることも果たせないままに、解散することになる。ここからはたして、いつの日か第三次研究会が生まれ出るであろうか。

一九八七年十二月

近世仏教研究会

同人一同に代って 大桑 斉